

いずみ

第 25 号

2008 年 10 月 1 日発行

(題字: 國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 25



《農 神》

岩見沢農業高校前庭

(1957 年設置、ブロンズ、石、高さ3尺)

高い台座に凛として立つ稲作の女神。像は90センチと小さいが、豊かに実った稲穂を手にした像は、本郷新の「今年も豊作であれ」との願いを込めた熱い思いが伝わってくる。

(写真・文 仲野三郎)

本郷新彫刻シリーズ 25「農 神」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
巻頭言「郷土の芸術家にいまこそ光を」	橋本信夫 3
特別寄稿 「中島公園と山内壮夫の彫刻」	佐藤友哉 4
ミュージアムの窓辺から「OKUI MIGAKU ギャラリーを開設して」	奥井登代 6
音威子府・旭川彫刻鑑賞バスツアー感想	7
仲野三郎、菅野富夫、羽賀隆、高橋淑子	
アルテピアッツア美唄日帰りバスツアーに参加して	9
桑原昭子、昆野照美	
橋本会長 NHK に出演 展覧会案内、会員交流プラザほか	10

本郷新記念札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（10月—12月）

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
<p>▼北の彫刻展2008年 一心の中の自由な世界— 10月13日まで</p> <p>▼10月18日—11月3日(貸館) 「白石齊・孝子2人展」</p> <p>▼平成20年度後期収蔵品展 やさしさに包まれて —本郷新の母子像— 11月8日—3月29日 野外彫刻を含め18点を 制作した本郷の母子像の 彫刻、絵画を展示。</p>	<p>▼本郷新の彫刻世界 10月13日まで</p> <p>▼平成20年度後期収蔵品展 あこがれのヨーロッパ 120日間のヨーロッパ滞在スケッチ 10月18日—3月29日 1952年に初めて海外を 旅した本郷のスケッチ作 品など。</p>	<p>▼10月25日(土) ステージV 「三角山と大倉 山の縦走」</p>	<p>▼10月18, 19日 造形教室(テラコッタ)</p> <p>▼11月3日(月) 市民サンクスデー</p> <p>▼12月23日(火) クリスマスコンサート</p>

本郷新記念札幌彫刻美術館 札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

◇開館時間：午前10時—午後5時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西28丁目」駅下車 ジェーアール北海道バス「環20」
山の手環状線3番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩10分

郷土の芸術家に今こそ光を

札幌彫刻美術館友の会会長 橋本 信夫

本郷新、佐藤忠良と同窓

北海道の彫刻芸術の発展に大きな足跡を残した本道出身の彫刻家、山内壮夫先生（1907~1975年）の生誕100年を迎えた。友の会ではこれを記念して様々な事業を企画することとなった。

山内壮夫は1907年、岩見沢生まれ。7歳の時に札幌市に移り住み、札幌師範学校付属小学校（現北海道教育大学付属札幌小学校）、札幌第二中学校（現札幌西高）を経て東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）工芸彫刻部を卒業した。たまたま小・中・高専を通じて本郷新が山内の2年先輩に、また、佐藤忠良が二中で山内の5年後輩にいたことから、三人は郷土の深い絆に結ばれながらそれぞれ彫刻家としての道を歩み、中央と北海道で大きく芸術活動を展開した。

収蔵作品が少ない札幌市

戦前、山内は本郷らとともに揺籃期の道展彫刻部の発展に尽くし、また戦後は中央で本郷、佐藤らと新制作協会彫刻部の創設に、本道では全道美術協会の設立に参画して全道展の発展に大きく貢献した。しかし、山内は東京で1975年、68歳で他界した。その後、作品と資料が旭川市彫刻美術館に寄贈されたこともあり、札幌市内の美術館における収蔵数が限られ、没後33年を過ぎながら、これまで札幌では回顧展さえ開かれることがなかった。

札幌市内の野外彫刻としては市民会館前

の「希望」（1957年）などのセメント像が7点、大通公園の「花の母子像」などブロンズ像が13点、アルミニウム像1点の計21点がある。しかし、これらの彫刻には作者名やキャプションのないものさえあり、残念ながら市民における山内の知名度は著しく低い。

山内彫刻の大きな特徴としては「希望」、中島公園の「笛を吹く少女」などの4作品（いずれも1959年）や円山公園の「よいこつよいこ」（1952年）など、セメントの作品が挙げられる。しかし、セメントはブロンズに比べてもろく、半世紀にもわたって北海道の厳しい自然環境にさらされた結果として汚れ、さび、亀裂や破損などが目立ち、早急な保全対策が求められている。

5事業で山内芸術の普及

これらのことから友の会では今年度、山内壮夫生誕100周年記念特別事業として、以下の五つのプロジェクトを企画することとした。①札幌市内の山内作品の資料収集と解説②野外彫刻資料のデータベース化と彫刻地図コンテンツの制作③山内彫刻の清掃など「街なかの美を守ろう」運動の推進④会報「いずみ」とホームページによる山内壮夫の生涯と作品の紹介⑤山内芸術に関する教材ビデオの制作。

これらの事業をもとに本道の生んだ彫刻家山内壮夫の作品ができるだけ多くの市民に親しまれ、彫刻芸術の進展に役立てられれば幸いである。

中島公園と山内壮夫の彫刻

北海道立近代美術館学芸副館長 佐藤 友哉

彫刻家山内壮夫と札幌市とのかかわりが非常に深いことは周知のことだろう。市民会館前の〈希望〉をはじめとして、市内には数多くの野外彫刻が置かれている。とくに中島公園には〈森の歌〉など計5点の作品があって、昔はさながら山内壮夫の彫刻公園のような雰囲気醸し出していたものだった。しかし近年では札幌コンサートホールが誕生するなどして公園自体が大幅に再造成され、今ではまったくその様相を変えてしまっている。もちろんこれは時代の推移というべきことかもしれないが、たとえば〈森の歌〉などはかつて白コンクリートで出来ていたもので、中谷宇吉郎の設計による雪の結晶をデザインした噴水池と一体になっていた。

作品の様相変える環境変化

しかし今では公園の北口にブロンズに置き換えられ、単体の姿でススキノ方面から公園を訪れる人を迎えている。だが当時を知るものにはどうも構成にアンバランスが感じられてしまう。それはもともと六角形の台座がかつての噴水池の水平に広がるデザインを想起させるからなのかもしれない。ともあれ唐突に円柱状の物体が垂直に地面から出現したという印象は否めないのだ。このことは周囲の構築物とともに設計されたモニュメントはそれと切り離して設置することはやはり困難だということを示唆してもいるだろう。

しかしもちろん1959年の北海道大博覧会を記念して建てられたこのモニュメントが中島公園に丁寧に残されたということは、札幌の歴史の一コマを記念するだけでなく、山内壮夫という彫刻家を顕彰する意味でもじゅうぶん意義あることに異論はないだろう。

このほか中島公園には〈笛を吹く少女〉〈猫とハーモニカ〉〈鶴の舞〉〈母と子の像〉があるが、これはかつて公園内にあった百花園に関連した作品だった。これらも〈森の歌〉と同様に新たに設置し直されたのだが、ゆるやかに円形を描く広場に沿ってこれらが配置されているものの、その構成は残念ながら緊密性を欠いているように思える。かつては池もあり、小規模ながら整然とした構成のなかに作品が配置されていたし、姉妹都市ポートランドから贈られたというバラや、チューリップ、ツツジ、ライラックなどの花々との調和も好ましいものだったように記憶している。

望まれるキャプション設置

またさらに言えば、これらの彫刻にキャプションがないのがなんとも残念だ。作者や制作年、タイトルが明記されていないのである。たしか以前からキャプションはなかったと思うが、移設する際にこうした配慮があればよかったのではないだろうか。これらの作品のすぐ側にある札幌コンサートホール前の安田侃の彫刻や、公園の再造

成にあっても制作意図を刻んだ台座や基壇が微動さえしなかった朝倉文夫の顕彰碑<木下成太郎像>などと比べてみればこのことがよく理解されるだろう。山内壮夫の彫刻はそれに比べてきわめて慎ましやかなのである。

それはともあれ、このなかの<笛を吹く少女>と<鶴の舞>は記念碑的な大作とは言えないが、山内壮夫の作品のなかでもきわめて優れたものだろう。それはこの作家の一番充実した時期の作品であり、その良質な側面が無理なく表現されていると思われるからである。前者は1959年、後者は1965年の作品だが、この1950年代後半から1960年代前半という時期に、山内壮夫の作風はヘンリー・ムアなどの造形に示唆を受け、それまでのブールデルばりの荒々しい具象的作風を捨てて一挙に抽象表現へと変化する。これらはまさにこうした作風の変化をよく示しているだけでなく、ゆるやかな曲面によって構成されたフォルムは山内ならではの晴朗な気品と優美さを湛えているのである。

中島公園こそ安住の地

中島公園近隣で同時期、かつ同様の質を持った優品としては、南9条緑地にある<春風にうたう>があげられるだろうか。これらの作品は<希望>などという大テーマを着せられた作品に比べてはるかに自由で豊かな造形の魅力に満ちているが、このことは改めて強調しておくべきことではないかと思う。蛇足ながら<春風にうたう>にもキャプションがついていないが、そのかわり台座には水道メータのラベルが貼ってあり、またステンレスで出来た結構大きな市消防局の防火水槽吸水管が側にあって、そこに

はそれと分かる立派なキャプションがついている。

ところで<猫とハーモニカ>はユーモラスで親しみが前面に出た作品だが、じつはこの作品のタイトルについて以前から不思議に思っていた。かつて吉田豪介氏もこのタイトルは俗称かもしれないと『札幌の彫刻』(さっぽろ文庫21)のなかで述べていたが、これは猫がハーモニカを吹いているところというよりも、やはりギリシア神話に登場する牧神パーンが葦笛を吹いているところであろう。とすればタイトルも<牧神>とすべきかもしれないが、キャプションをつけないのであればこうしたタイトル問題も不要ということだろう。

ともあれ中島公園と山内壮夫の彫刻が、かつてあったような状態とは言えないまでも、このように5体ともゆかりの深い場所に安住していることはやはり特筆すべきことだろうし、また撤去されずに中島公園に残ったということは、たとえ作者は知らずとも、やはり札幌市民に深く親しまれていたという証なのではないかと思う。札幌には戦後まもなく制作されたブールデルばりのモニュメント(札幌西高校の<拓けこの宝庫>)や、1970年代の作品(大通公園の<花の母子像>、五輪大橋の<飛翔>)もある。しかしそれらを見て思うのは、やはり山内壮夫の本領ともいえる作品はやはり抽象的、有機的そして晴朗で優美なフォルムを唄う作品群なのではないかということだ。その意味で中島公園は今でも山内壮夫の彫刻の神髄を伝えてくれる重要な場所なのである。

OKUI MIGAKUギャラリーを開設して

奥井 登代 (OKUI MIGAKUギャラリー主宰 会員)

長男が生きた証のため

OKUI MIGAKUギャラリーは19歳で交通事故のため他界した奥井理^{みがく}が残した絵を展示するギャラリーです。13年前、突然の息子の交通事故死を前に私たちはただ茫然とするばかりでしたが、画家を目指していた彼が遺したたくさんの絵や文章に出合って、彼の生きた証を残したいと思うようになりました。



1996年さいとうギャラリーで開いた1周忌の遺作展、98年には遺作集「19歳の叫び」を北海道新聞社から出版、その年、出版を記念して赤煉瓦ホールで奥井理全作品展を開催しました。未熟な絵にもかかわらず、その反響の大きさに驚いたものです。若者だけでなく幅広い年代の人の心をとらえていたのです。理の絵を見て励まされたり、人生を考えるきっかけになったり、エネルギーをもらったという感想がたくさん寄せられ、そして「見たい時にみがく君の絵が見られたらいいのにね」という言葉を聞きました。その言葉がきっかけでした。「自分が絵で励まされているように、自分も人を幸せにできる絵描きになりたい」と書き残していた理。そうだ、理の夢を実現させてやろう！そんな思いで実現したのがOKUI MIGAKUギャラリーです。

若いアーティストを応援

当初、私たちはギャラリーで理の絵を展示して皆さんに見て頂くことしか考えていませんでした。しかし、建設過程で、あるいは開設してから様々な方々と出会い、OKUI MIGAKU ギャラリーが果た

していく役割を考えさせられました。まさに奥井理が19年の間に様々な人との出会いで育てられたように、ギャラリーもいろいろな人たちに育てられていることを実感しています。開設日に来館された教育大の阿部博光先生との出会いから若い演奏家を応援するOKUI MIGAKU ギャラリーコンサートが始まり、すでに35回を重ねています。

若い演奏家は理の絵に囲まれての演奏に、絵から力を得ているように思えると話してくれます。若い演奏家を応援し、音楽を身近に楽しめる場としてのギャラリーの役割をこれからも果たしていきたいと思っています。

アートの感動を伝えて

今年は奥井理画文集「地球人生はずばらしい」(求龍堂)を出版したことから、本を見た若者が訪れます。開館して5年、入館者数は決して多くはありませんが、「来て良かった」「元気をもらいました」等々、心に何かを感じて下さる姿が一番うれしいことです。いつか「いずみ」に荒井記念美術館の学芸員の方が書かれた言葉「入館者数より一人の感動」を思い出します。とは言えやはり、できるだけ多くの方にアートの感動を伝えることができれば理も喜ぶと思います。

アートの感動を伝える場として、若いアーティストを応援する場としてOKUI MIGAKUギャラリーが育つためにこれからも模索していきたいと思っています。

OKUI MIGAKUギャラリー 札幌市中央区旭ヶ丘5丁目
6-61 TEL011-521-3540◇10:00—18:00 月曜休

音威子府・旭川彫刻鑑賞バスツアー 充実の2日間

7月7、8日の両日行われ、初日は音威子府の「BIKKYアトリエ3モア」と「アジアプリントアドベンチャー」の鑑賞、翌8日は旭川で北海道療育園前庭の彫刻群「彫刻の森 風のギャラリー」、旭川彫刻美術館を訪ねて回った。参加者に鑑賞の思いをお願いした。

■砂澤ビッキとアトリエ3モア

仲野 三郎（会員）

砂澤ビッキの本名は恒雄（ひさお）で、幼時の愛称ビッキ（かえる）がそのまま使われている。父はトアカンノ（2本の矢はいらぬの意）と呼ばれた狩の達人。母ベラモンコロはクリスチャンで、アイヌ刺しゅうの名手。ビッキは作品にこの文様を受け継いでいる。

旭川の近文小学校から養生国民学校、そして戦後の道立産業講習所を経たビッキは1948年（昭和23年）から神居村雨粉で原野を開拓する生活に入り、ここで本格的に絵を描くようになった。

ビッキが世に出るきっかけをつかんだのは阿寒。体調を崩して阿寒に移った父親を助けて阿寒湖畔でみやげ物店を営んでいたビッキが、「週刊朝日」に登場したことによる。1955年、取材で立ち寄った大宅壮一は「シャンソンを歌い、抽象美術を語る青年—内地娘との恋物語」として彼を取り上げた。この記事が縁で作家澁澤龍彦（当時、東大文学部フランス文学科）との交流が生じ、以降、鎌倉と阿寒を行き来するようになる。

1955年（43年）にモダンアート展に初入選し、さらにアンデパンダン展出品と活動の幅を広げたビッキは68年、札幌に居を移し、そこを「アトリエ・モア」と名づけた。10年後の78年、再び音威子府に居を移す。

音威子府に来るように勧めたのは当時の音威子府高校長の狩野剛で、山村の広大な空間と豊富な木材に魅せられたビッキは移住を決意した。1978年11月、47歳のビッキは旧小学校をアトリエとして新しい環境での生活と制

作を開始する。79年から「樹を語り作品展」を主宰し、83年には北海道海外交流事業の派遣員としてカナダに渡り、音威子府の駅前にオトイネップタワーを、札幌芸術の森には「四つの風」を設置するなどの活躍をしたが、89年1月、多くの作品を残し57歳で亡くなった。

このアトリエは現在、村のシンボル「森と匠の村の美術館」と位置づけられ、「エコミュージアムおさしま」として運営されている。今回の友の会美術探訪はこの美術館と、恒例の「樹を語り作品展」に変わって開催されたアジアプリントアドベンチャーを觀賞すべく企画されたが、古くからビッキと交流のあった館長村上實氏のビッキの横顔を含んだ実のある話が面白く楽しかった。

なお、この村のもう一つの宝として、おといねっぷ美術工芸高校の活躍がある。この学校は昨年、学生美術全道展で最高賞の全道美術協会賞を獲得している。村の人口の約10%に当たる107人の生徒は2年進学時に美術か工芸のコースを選ぶが、生徒はみな夢いっぱい。村の行事にも積極的に参加する。この生徒たちが週末になると美術館ガイドをしているので、また訪ねてほしい。

■音威子府・旭川彫刻鑑賞の旅

菅野 富夫（会員）

2008年7月7日と8日の二日間、札幌彫刻美術館友の会の方々が企画された「音威子府・旭川彫刻鑑賞の旅」に、家内と一緒に参加しました。わが家では久しく車がなくて、旅行には不便で、今回のようなバス旅行はありがたい機会でした。ビッキの作品に出会うのも久しぶりでした。

BIKKYが札幌で作品展を開いたときだったと思いますが、砂澤涼子さんと一緒にわが家に立ち寄ってくれました。BIKKYははじめ酒を飲むだけでほとんどしゃべらず、涼子さんが「BIKKYは恥ずかしがっているのですよ」ととりなしたほどでしたが、少し酔いがまわると、BIKKYは自身の造形への思いを多彩で独特の言葉遣いと身振りで表現するようになり、BIKKYの造形への情熱と発想の一端を見た思いでした。

BIKKYの作品をまとめてみる事が出来た今回の旅は、元気なころのBIKKYをしのぶ機会になりました。涼子さんが編集・発行された「木馬に乗ったビッキ 砂澤ビッキ葬儀記録、1989年4月25日発行」を再読しました。この記録集はアトリエ3モアの説明に不十分な側面を補いました。

北海道療育園の「風のギャラリー」もすばらしい展示でした。療育園に第一級の造形があり、園児たちがこれら第一級の造形に日常的に親しむ事が出来ることはすばらしいことだと思います。

■砂澤ビッキ満喫ツアー

羽賀 隆 (会員・木工作家)

砂澤ビッキの作品を見るならこの機会を逃さないと思い、音威子府バスツアーに参加しました。

私が砂澤ビッキの作品に出合ったのは、記憶はあいまいなのですが、札幌彫刻美術館か道立近代美術館で、何かの彫刻展を見た20年以上前のことです。多くの小枝を脚部としたくらげ様の作品を見て、こんな彫刻もあるのかとおもしろく思いました。本田明二の獲物を背負った人物像などが、一緒に展示されていたように思います。

それ以来、音威子府で「風」シリーズなどの大作を、チェーンソーを駆使して精力的に制作しているという話を聞き、見たいと思いながら果たせませんでした。

私は主にクルミ材を使って木工をしています。そのせいか、分野は違いますが、彫刻家

や建築家が木をどのように扱うのか、いつも興味をひかれます。

砂澤ビッキのアトリエを再現した「アトリエ3モア」では、巨木に長い腕木を交差させた作品「TOH」に心を揺さぶられました。一度切り倒された木が、ビッキの手で再び命を吹きこまれ、誇りたかく厳かに立っていると感じました。これはビッキ自身なのでしょうか。アトリエのノミなどの工具類も、私には興味深いものでした。

二日目の旭川彫刻美術館の砂澤ビッキ展では、構成的なレリーフ「カムイミンタラ」も見ることができ、充実した砂澤ビッキツアーでした。

■風のギャラリーにて

高橋 淑子 (会員)

天塩川温泉での疲れも癒えたバス旅行の二日目、旭川の北海道療育園彫刻の森・風のギャラリーで、見学に先立ち、施設の概要説明を受ける際、担当者から「3部だけですが、参考にどうぞ」と彫刻の写真が載った図録にも匹敵する立派なパンフレットを手渡された。「3部しかないということは、18名の参加者で抽選？」と考えをめぐらす。

この彫刻の森の維持には、現在も多くの人々の理解と寄付が不可欠だという。パブリックアートとして見学は自由で無料ではあるが、この際、友の会としてこのギャラリーに貢献することが必要だと感じた。参加者一同の「パンフレットが見たい、欲しい」という気持ちも痛いほど分かる。とっさに、「実費で人数分、パンフレットを頂けませんか」。すると、「寄付者名簿が載っている私的なものですが、差し上げましょう」と快く人数分を用意してくれた。山内壮夫『風の中の母子像』からイサム・ノグチ『プレイスカルプチャー』まで、美術館顔負けの16体の作品を堪能した後、大いなる感動と引き換えにささやかな寄付金を残して、次の目的地へとバスに乗り込んだ私たちだった。

芸術へのエネルギー実感

桑原 昭子(会員)

夏空がどこまでも広がる日、友の会アートツアーはアルテピアッツア美唄を訪れました。陽射しが彫刻にそそぎ、何組もの親子が水遊びに興じる姿がゆったりと目に入ります。いつ訪れても新鮮な感じで彫刻鑑賞に浸れる不思議な場所です。

帰省中の安田先生とお会いできる機会を期待でいっぱいでした。「友の会メンバーの訪れを待っておりました」と先生は素敵な笑顔で迎えてくださいました。

「昨日、散策コースに熊の親子が彫刻鑑賞に来たのです」と笑わせ、私たちの緊張を和らげて下さる心遣いが伝わります。熊の親子の彫刻鑑賞の邪魔は遠慮しておきました。

若き日、札幌での初めての個展会場に本郷新先生が訪れ、作品批評を当時の「北海タイムス」に書かれ、励まされたことが彫刻家として生きる自信に繋がったと、最近の出来事のように生き生きと語られたことに驚きました。本郷先生も才能ある安田青年との出会いを誇りに思ったことでしょう。郷土の偉大な二人の彫刻家の出会いのエピソードに感銘しました。

アルテピアッツア美唄を公開して15年の歳月が経ち、残したい、伝えたい芸術の広場として皆さんの支援で続けていきたいと熱く語る先生でした。

これからも新しい芸術作品に挑むエネルギーに溢れている安田侃先生との出会いが素晴らしい夏の日でした。

無料でも感動をいっぱい

昆野 照美(会員)

8月10日、総勢40人で「アルテピアッツア美唄と北村温泉ツアー」へ。バスの中で、会員の田中和子さんから安田侃先生の彫刻についての説明があり、にわか勉強。先生のお話を直接聞けるのを楽しみにアルテピアッツア美唄着。先生は聞きしにまさる素敵な方でした。

みなさんご存知と思いますが、アルテピアッツア美唄は無料の施設です。維持費に年間1600万円もかかるのに無料にしているとのこと。市からの補助が1300万円、残りはNPOなどからまかなわれているそうです。「どうして料金を取らないのか？」という質問をよくされるそうですが、安田先生はいつもこう答えると言っていました。

「どうしても日本人は経済効果を考える。よって入場料金をこれくらい払ったから、なんぼ元を取ってやろうとなってしまう。ここではそういうことは考えずに、無料だけれどたくさん感じることもあるから、どんどん感じてほしい」というようなことでした。

楽しい話の後には、北村温泉。温泉の総支配人で、会員でもある大橋泰子さんの計らいで飲み物の差し入れもあり、もちろんお料理もおいしく、懇親は盛り上がりました。

最後に石川啄木の碑へ。大橋さんの名調子の説明がつき、啄木が思いを寄せていた人が北村に住んでいたことを初めて知りました。とても楽しい一日を過ごしました。

橋本会長が NHK に出演

橋本信夫会長が9月11日、NHK札幌放送局の「ほっからんど北海道」に生出演した＝写真＝。出演したのは同番組の「北海道の元気人」のコーナー

で、道内の各分野で活躍する人に生き方や取り組みを聞く番組。中井美穂キャスターの問いかけに友の会で取り組んでいる「街角の美を守ろう」運動の狙いや活動ぶりを表情豊かに分かりやすく話しかけた。15分ほどの番組だったが、いつもの自然体で熱っぽく意気込みを語っていた。



中井美穂キャスターの問いかけに友の会で取り組んでいる「街角の美を守ろう」運動の狙いや活動ぶりを表情豊かに分かりやすく話しかけた。15分ほどの番組だったが、いつもの自然体で熱っぽく意気込みを語っていた。

展覧会案内

- ◇千葉彰子「青い夢へ展」10月5日まで
さいとうギャラリー（南1西3ラ・ガレリア5F）
- ◇小野寺紀子彫刻展 10月12日—11月2日（月—金 9:00—18:00 土日 16:00まで）北2条STVエントランスアート（北2西2STV北2条ビル1F）
- ◇白石齊・孝子2人展 10月18日—11月3日（月休館）本郷新札幌彫刻美術館（中央区宮の森4-12）本郷新媒酌による二人の結婚40周年記念展。
- ◇OKUI MIGAKU ギャラリーコンサート
11月9日 15:00より。（OKUI MIGAKU ギャラリー中央区旭丘5-6-61 ☎011-521-3540）フルート（三浦茜）とハープ（山宮るり子）のデュオ。



会員交流フラガ



長峯慰子さん

オペラ「蝶々夫人」に出演

札幌の社会人オペラの会「ラ・コンパニーアルモーニカ」によるオペラ「蝶々夫人」（星出豊音楽監督・昭和音大教授）の公演が8月2日、札幌市教育文化会館で行われ、長峯さんが蝶々夫人の母親役で出演した。昨年が続いて2度目のオペラ出演だったが、「華やかな舞台上、楽しそうな熱演ぶりが印象的だった」と鑑賞した人の感想。

中村守己さん

自作脚本を劇団「にれ」が公演

8月27、28日、札幌市教育文化会館で行われた劇団「にれ」の創立50周年、第43回公演で会員の中村さんが書いた「黄昏（たそがれ）のララバイ」（一幕二場）が上演された。札幌のビルの谷間にある老朽化した建物を巡る戦中世代の鎮魂歌がテーマ。

2009年新年会は1月24日に開催

来年の友の会新年会を1月24日（土）に開くことが9月11日の役員会で決定した。会場は今年と同じ札幌すみれホテル。恒例の講演者など詳細は未定。

札幌彫刻美術館友の会会報「いずみ」No.25

2008年10月1日発行

札幌彫刻美術館友の会事務局（札幌市中央区南9条西4丁目7-1-1003）

発行人 橋本 信夫

編集スタッフ 斎藤美年子：011-643-7246

大内 和：011-884-6025